

[書評]

『新敬語「マジヤバイっす」——社会言語学の視点から』

(中村桃子、白澤社、2020年)

松村 瑞子

本書(初版第一刷、221頁、2200円+税)は、「そうっすね」「まじっすか」などの「ス体」¹⁾を、イデオロギー(社会に広く認められている考え方)と密接に関わる「〇〇ことば」の一つであるとして、社会言語学の観点から分析したものである。著者中村桃子氏は、『女ことばと日本語』(岩波新書)、『「女ことば」は作られる』(ひつじ書房)などの著書で、「〇〇ことば」のもつ社会的意味について数々の研究を行ってきた。本書では、社会言語学的視点を取り入れながら、体育会系男子の若者言葉と言われてきた「ス体」の成立にはイデオロギーが関わるとして、分析が行われている。本書のタイトル「マジヤバイっす」が取り分け目を引くのに加え、研究対象自体も日常生活やテレビのCMで耳にする表現であるため、言語とイデオロギーの関係という、通常なら一般の読者には敬遠されがちな内容が、身近に感じられるのみならず、分かりやすく議論されている。

全6章からなる本書では、自然会話での「ス体」の用法に加え、ウェブサイトやテレビCM等のメディアでの「ス体」の用法が分析される。第1章『「ス体」という言葉づかい——形成過程・言語要素・イデオロギー』では、「ス体」研究の意義が論じられる。著者によると、「ス体」は1950年代に既に漫画において確認されており、最初は主にドラマの中のとび職人や体育会系クラブの若い男性部員が使っていたが、90年代には一般の若い男性にも広がり、現在では女性やメディアでも使用されているという。著者は「〇〇ことば」の形成を考えることの意義として、その成立の背景には社会の区別や差別を支えるイデオロギーが密接に関わっているという点と、その成立過程にはメディアでの使われ方が大きく影響しているという点を挙げる。「ス体」の

形成には、丁寧体と普通体を区別する「敬語イデオロギー」と、理想の男らしさを重視する「ジェンダー・イデオロギー」が密接に関わっているとした。また、話し手がことばの「使い方」に関してもっている信念や意識である「言語イデオロギー」が「ス体」の使い方に対する自らの信念や意識に正当性を与えており、さらにメディアでの「ス体」の用法もその形成に影響しているという。第2章「男子大学生の『ス』の使い方——親しい丁寧さ」では、体育会系クラブ所属の男子大学生の実際の会話における「ス」の使用が分析される。録音された会話では、丁寧体である「です・ます」と同様に、「ス体」は後輩が先輩だけに使っており、後輩同士では使っていなかった。また、先輩は決して後輩に「ス体」を使っていなかった。具体的な会話場面を分析すると、「ス体」は丁寧体と同様〈丁寧さ〉を表すが、丁寧体と比較すると〈親しさ〉が加わり〈親しい丁寧さ〉を表現するという。また、「ス体」が広く普及した背景には、敬語の働きの変化、日本語の敬語体系で〈親しさ〉と〈丁寧さ〉を同時に表現することの難しさ、男性集団の階層性があるとした。第3章「メディアのことば——ことばの表象と社会変化」の中で特に「ス体」と関わりが深いのは、日常の会話で使われる言葉づかいがメディアで使われると、その意味が狭まる、すなわち統制されるという点である。「ス体」についても、日常会話で使用される時には、多様な意味が伝えられるのだが、メディアで使用されると、その意味が統制されるとした。第4章「『ス』は丁寧語じゃないっす——ウェブサイト『発言小町』における評価」では、このウェブサイト上の投稿には、投稿者がもっている言葉づかいに対する信念が現れているという。「『っす』は敬語っすよね」という投稿に対する応答の約90%が「スは敬語ではない」と評価している。その評価の方法には「まじめ系レス（応答）」と「おもしろ系レス（応答）」があるが、前者はス体を正しい日本語・正しい敬語から排除し、後者はス体をパロディー化・にせもの化することで〈面白さ〉という狭い意味に矮小化しているという相違はあるが、両者とも敬語イデオロギー（正しい・本物の敬語を使用することが重要だ）を維持するという結果になっているとする。第5章「男性がテレビCMで使う『ス体』——主導的男性性の揺らぎと維持」では、テレビCM（コマーシャル）は「ス体」をどのような男性像を描くのに使っているのか、その結果「ス体」

にどのような変化が起こっているのか、さらにその変化が主導的男性性に変化をもたらしているのかが議論される。CMで「ス体」を使用するのは、先ずパロディー化された「鬼」や「村人救済を断る勇者」のような「変人」であるが、これらの人物は〈伝統的な男らしさ〉を軽々と乗り越える〈新しい男らしさ〉の可能性を示唆しながらも、「変人」であるがために結局は〈伝統的な男らしさ〉の価値は維持されることになる。同様に「ス体」を使用する、従来の「上下関係」や「あるべき男らしさ」こだわらず行動する若いサラリーマンは、従来の男性性に対して疑問は喚起するが、自分の言いたいことだけ言う理解できないキャラクターでもあり、結果的に従来の男性性の価値は維持されるという。さらに、「ス」という音は〈勢い〉をつけるという効果もあげることができるとする。第6章「女性がテレビCMで使う『ス体』—新しい女性性の創造？」では、実際の女性およびテレビコマーシャルの女性が使っている「ス体」を見ることで、それがどのような女性像を提示しているのか、その結果「ス体」にどのような変化が起こっているのか、さらにその変化が女性性にも変化をもたらしているのかを論じる。実際の女性については、「ス体」を使うことは少ないが、稀に使われている場合「自身のアイデンティティの表現」として使っているとする。著者によると、近年〈好ましい女性性〉に女性から見て好ましい女性性というのが加わったという。それを表現するのに、2000年代から著名な女性がテレビCMで「ス体」を使用していると言う。この女性のCMで使用される「ス体」も〈勢い〉、〈軽さ〉、〈聞き手意識の薄さ〉、〈面白さ〉など男性CMと同様のスタンスが与えられているが、女性のCMではさらに〈新しい女性性〉という男性の関心から自由で、女性同士の友情や励ましを大切にする、女性から見て好ましい女性性という社会的アイデンティティを提案すると述べる。ただし、これはフィクションの中に限られており、「ス体」が女性性を変化させるかどうかについては、現状では不明であるとする。

本書は、「ス体」を真正面から取り上げた初の研究書であり、ジェンダー研究という観点から注目に値する。ここでは特に、メディアにおける「ス体」の用法と、実際の会話における「ス体」とジェンダーについて少し考えてみたい。本書では、メディアにおける「ス体」の用法に多くのページが割かれ

ているが、ジェンダー論という観点からみると、この用法は興味深い。第3章でメディアのことばを研究することの意義について、取り分け言語要素を社会的意味と結び付ける指標性という観点から述べた後、続く第4章から第6章でメディアでの「ス体」の用法について議論が行われている。第4章のウェブサイト上の書き込みについての議論は、「ス体」に関する一般的な（ある意味驚愕の）解釈がどのようなものであるかを認識させてくれるものであり、本書で論じられている敬語イデオロギーや言語イデオロギーが確かに存在することが分かる。続く第5章と第6章では、テレビCMで使用された男性の「ス体」と女性の「ス体」について詳しく分析されているが、テレビCMの制作者側が「ス体」使用によってどのような社会的意味や社会的価値を表現しようとしているかを垣間見ることができる。瀬地山角は『炎上CMでよみとくジェンダー論』（2020）において、近年批判的になったCMやPR動画は性役割分業規範を前提としたもの、男性の願望を描写してしまったもの等の4種に分類することができるとしているが、その観点からすると、本書で取り上げられている「ス体」を使用したCMは、「敬語イデオロギー」の反発を出来るだけ少なくしながらも、これからの時代に受け入れられる又は求められる社会的価値を表現しているもののように思える。第5章のCMに登場する男性のうち、「ス体」を使用する男性は、鬼や上司に全く気を使わない部下など「変人」が殆どであるが、「軽さ」「勢い」「面白さ」という意味を表し、従来の「伝統的・主導的男らしさ」という男性性に疑問を呈する。一方、CMで「ス体」を使用する女性（上戸彩、綾瀬はるか、黒木華等の女優）は、ほとんどの場合「好ましい女性」として描かれており、男性との関係から規定されない、女性にとって好ましい女性という「新しい女性性」を体現しており、これから求められる社会的価値を表現しているとも言える。しかし、著者自身が述べているように、この「ス体」の使用が日本における「男らしさ」「女らしさ」を変化させているかどうかは現時点では不明であり、今後も注視していく必要がある。もう一点、今後さらなる展開が求められているのは、多様な関係の参与者同士の自然会話において、「ス体」がどのように使用されているのかについての実証的な研究であろう。評者自身も、簡単な観察ではあるが、これまで収集してきた会話資料の中の、久志唯（2007年九

州大学大学院比較社会文化学府大学院生）の収集した大学の体育会系クラブ所属の性別・上下・親疎の異なる男女2名ずつによるそれぞれ30分ずつ4組の会話（『平成19年度日本語会話資料集』因京子・松村瑞子編集）における「ス体」の用法を観察してみた。すると、ほとんどは後輩の男性が男女を問わず先輩に話すときに使用しており、先輩および女性の使用は冗談の使用に限られていた。さらに二人の関係が「親」であるときに、また後輩が自分についての話を連続して話すときに、「ス体」が頻繁に使われていた。今後、多様な関係の参与者間の自然会話における「ス体」の用法を相互行為的に分析していけば、その社会的意味がより明らかになることが期待できる。

中村桃子氏は、本書の最後で、「私たちが、敬語イデオロギーやジェンダー・イデオロギーだけでなく、コマーシャル界のイデオロギーにも対応しながら「ス体」を使うことで、この新しい言葉づかいには様々な意味が与えられていく。「ス体」ウォッチャーのひとりとして、今後も「ス体ワールド」から目が離せない」と述べる。私自身も、本書を読むことで、改めて言語と社会との関係について考えることの重要性を再認識させていただいた。

【注】

- 1) 著者によると、「ス体」とは、「ス」（「す」「っす」「ス」「ッス」など様々な表記される発音を含む）+「体」（「スタイル」の訳語：丁寧体、普通体と同じ「体」）である。

（まつむら よしこ・九州大学名誉教授）